

インテグラル思想研究会
 インテグラル・スピリチュアリティ (Part One)
 鈴木 規夫 Ph. D. (Norio001@nifty.com)
 2006年8月12日 (土曜日)

今回は、ウィルバーの最新作である *Integral Spirituality: A startling new role for religion in the modern and postmodern world* において展開されている議論を参照しながら、現代において必要とされる Vision Logic (インテグラル) 段階の意識構造を基盤とするスピリチュアリティ——「インテグラル・スピリチュアリティ」——とはいかなるものであるのかを探求したい。

インテグラル・スピリチュアリティの諸条件

Myth of the Givenの克服

スピリチュアリティにたいする現代哲学の批判

神秘体験等をとおして獲得された洞察は、必ずしも客観的・普遍的な事実の報告ではない。一般的に、実践者は、霊的領域をありのままに経験していると思いがちだが、実際には、神秘体験は、時空間に存在する主体としての個人を定義する諸々の条件の影響のもと構築されたものである。つまり、ありのままの体験として感得されたのは、実際には、主体としての個人が歴史的な存在として継承している諸々の条件を基盤として対象領域を認識することをとおして、創造されたものなのである (monological as opposed dialogical)。

現代哲学は、認識というものが、実際には、主体が自己の認識機能を用いて現実を構築する創造行為であることを指摘する。しかし、こうした現代哲学の恩恵を得ることなしに自己の教義を確立した伝統宗教は、しばしば、神秘体験をとおして認識されるものが普遍的な事実 (reality) であると思いがち。

実際には、修行という行為そのものが体験者の認知機能を条件づけする営みとならざるをえないにもかかわらず——しばしば、それは人間の本来のありかたをとりもどす限定解除の行為 (deconditioning) としてとらえられるが——その事実は無自覚である場合、そこで経験される神秘体験のあらわれかたが絶対化されることになるのである。

自己の体験の内容が、認識という行為をとおして構築されたものであることを無意識であることの結果、すでにそこに存在していたものをありのままに認識したにすぎないと思いがちを “Myth of the Given” と形容する。現代において、スピリチュアリティが知識人の尊敬を得ることのできる研究領域として確立されるためには、まず、こうした錯誤を克服することが要求される。

留意すべきは、人間の認識を規定する諸々の条件は、時間の流れのなかで個

人・集合・内面・外面を包含して展開する全領域（AQAL）にまたがるものであるということである。インテグラル思想においては、認識は、これらすべての領域の相互作用のなかで立ちあがるものとして理解されるのである。

また、一般に信じられているように、体験とは、必ずしも体験と解釈という2つの段階を踏んで展開するものではない。実際には、体験とは、すでにそれそのものが解釈なのである。つまり、体験というものそのものがAQALの創造物なのである。¹ このことは、これまで時空の拘束を超越したものとしてとらえられてきた神秘体験というものが——それがAQALの影響のもと創造されるという意味において——実は歴史の進展のなかでそのありかたを変化しつづけるものであることを示唆する。つまり、現代においては、神秘思想が人格陶冶の目標として設定する神秘体験のありかたそのものが、歴史の過程のなかで、刻々と変化するものとしてとらえられることになるのである。

	Gross	Psychic	Subtle	Causal	Nondual
Nondual (I-9)					
Causal (I-8)					
Subtle (I-7)					
Psychic (I-6)					
Vision Logic (I-5)					
Rational (I-4)					
Mythic Rational (I-3)					
Magic (I-2)					
Impulsive (I-1)					

Wilber-Combs Matrix (Combs, 1995/2002, p. 196)

インテグラル思想における責任

スピリチュアリティというものをとらえるうえで、こうした問題意識が強調される背景には、近年におけるウィルバー思想の段階的な発展があることを指摘しておく必要がある。この“Wilber 5”と形容されている発展段階を特徴づける重要事項のひとつは、コスモスが歴史的存在であることをとおして内包する非常に柔軟な性質を強調していることである。最新段階において強調されるこうした観点は、インテグラル思想の重要主題のひとつである意識進化のダイナミズムを画期的に再照明することを可能としている。

ウィルバー5は、意識構造というものをコスモス誕生の瞬間に所与の条件としてあたえられたものとしてではなく、むしろ、歴史の過程のなかでくりかえして経験されることにより、徐々に後世により継承される「習慣的方向性」

（“probability wave”）として定着していくものとして認識する。つまり、これは、意識進化というものを、過去においてあらかじめ敷設された「ルール」をなぞるのではなく、むしろ、「習慣的方向性」（“probability wave”）として存在して

いるにすぎない領域をひとりひとりが個人としての創造性を発揮して果敢に探求することをとおして、それをコスモスの共有財産として具体化していく本質的に創造的な営為として把握するのである。

あらゆる経験を将来に影響を及ぼす創造的行為としてとらえるこうした観点は、必然的にスピリチュアリティにおける重要主題である倫理について非常に重要な洞察を提供することになる。そこでは、現在という瞬間における個人の内的・外的活動のすべてがコスモスの将来を規定するものとしてとらえなおされることになる。つまり、インテグラル思想においては、自己の人生を真摯に生きることは、自己にたいする責任だけでなく、コスモスにたいする責任として理解されるのである。とりわけ、まだ日常的な持続的構造として集合的な規模で確立されていない領域（具体的には、集合意識の重心の範囲外である Vision Logic 段階以降の発達領域）を人類の共有財産としてどのように具体化していくのかという課題においては、先駆者としてその領域を開拓する人々の責任は非常に重要なものとなる。その意味では、個人における意識の探求は、集合的な意義と責任を有するものとならざるをえないのである。

しかし、実際には、大量消費主義 (Orange Meme) と価値相対主義 (Green Meme) の融合の結果として生みだされた“FLATLAND”の影響のもと、自己の内的・外的な行動のすべてを人類の将来にたいして倫理的責任をもつものとしてとらえる成熟した倫理意識は、今日、世界的に完全に溶解している。また、今日、先進国において流行している感覚主義・感性主義を基盤とした「スピリチュアリティ」は、自己の主観的視野への耽溺を称揚することをおして、「視野の拡張」 (perspective taking) という意識深化を醸成するための最も重要な活動を忌避する傾向にある。このために、現代社会の病理の克服を意図して取り組まれているはずのこうした営みは、実際には、自己の主観的な領域の絶対化を奨励することをおして——それは不可避的に自己中心性の肥大化をもたらす——現代社会の病理を深刻化させてしまっている。それは、現在という瞬間における自己の体験を時間的・空間的に超えて、長期的・集合的な人類の福利を志向するありかたを否定する退嬰的なものとして固着してしまっているのである。

その意味では、インテグラル・スピリチュアリティが志向するこうしたありかたは、現代という時代の趨勢の対極にあるものといえるだろう。²

意識状態と意識構造 (States and Stages)

スピリチュアリティについて実践者として探求するうえで、非常に重要となるのが、意識状態 (states) と意識構造 (stages) の相互作用である。

意識状態 (states) とは、一時的なものとして経験される「変性意識状態」 (non-ordinary consciousness) のことを意味する。その種類により、継続時間は異なるが、神秘体験においては、瞬間的なもの、数時間・数日間継続するもの、

そして、また数週間・数月間継続するものが存在する。しかし、それらは、高揚状態が持続したあと、最終的には終息していくものである。

意識構造 (stages) とは、日常的にはたつきつづける継続的機能として存在する「意味構築構造」 (meaning-making structure) のことを意味する。これは意識の統合機能として、内的・外的な情報を処理しながら自己と世界についての「物語」 (story) を構築するところのはたらきである。

発達心理学の調査・研究が示唆するように、意識構造は、自己中心性を減少するかたちで、段階的に成長していく。しかし、神秘体験等の非日常的な意識状態は意識構造がどの成長段階にあらうとも、基本的にあらゆる段階において発生することができる。実際、瞑想や薬物等、変性意識状態を醸成する技法は多様なものが存在しており、そうした技法は意識構造がどの成長段階にあらうとも実践することができるのである。また、それにくわえて、「至高体験」 (“peak-experience”) といわれる意図的な実践なしに発生する変性意識状態も意識構造がどの成長段階にあらうとも体験しえるものである。

ただ、ここで留意すべきことは、意識状態は、意識の統合機能である意識構造の影響のもと体験 (解釈) されるということである。つまり、体験 (解釈) の主体である意識構造の成熟度により、意識状態が有する意味は非常に異なるものとなるのである。その意味では、神秘体験において、人間は、非日常的領域をありのままに体験するのではなく、むしろ、自己の「認識の枠組」をとおしてそれを創造的に体験 (“enact”) するのだということが出来るだろう。

こうした観点をもとにして、ウイルバーは、「2種類の悟り」 (“two kinds of enlightenment”) が存在することを指摘する。

- 「垂直的悟り」 (“vertical enlightenment”)

人類進化の現在の段階において構築可能な最高の意識構造 (Susanne Cook-Greuter の発達理論において“Unitive Stage”と形容されている段階) を確立して、その認識の枠組をとおして、人類に経験可能な領域を持続的に体験すること。

- 「水平的悟り」 (“horizontal enlightenment”)

人類進化の現在の段階において構築可能な最高の意識構造 (Susanne Cook-Greuter の発達理論において“Unitive Stage”と形容されている段階) を確立することなしに、人類に経験可能な領域を意識状態として持続的に体験すること。

重要なことは、神秘体験は必ずしも体験者の人格的成熟を証明するものではないということである。また、さらに重要なことは、神秘体験は必ずしも意識構

造の垂直的深化を醸成するものではないということである。実際、無数の実例が示唆するように、神秘体験は、経験される文脈によって、意識構造の溶解（regression）・固着（stabilization）・深化（transformation）のうちいずれの結果をもたらす可能性を有している。その意味でも、しばしば指摘されるように、その成果が真の意味での人格的深化をもたらすことができるためには、内的探求は、必ず、適切な AQAL——「こころがまえ」（set）と「環境条件」（setting）——を必要とするのである。

現代という時代におけるスピリチュアリティの課題は、個人の内的探求を支援する AQAL が、FLATLAND を基盤として発生・蔓延している、自己陶醉・自己肥大を増幅する包括的な装置として強力にはたらいていることである。これは、一方では、大量消費主義というイデオロギーのもと、飽くことない資源の消費者としての自己を肥大化することをとおして、また、一方では、価値相対主義というイデオロギーのもと、「ありのまま」の自己を抱擁・崇拝することを称揚することをとおして、既存の意識構造を温存することにつながる。³ つまり、神秘体験において経験される「絶対的な充足・確信の感覚」（“the sense of absolute conviction”）は、「構築物」である意識構造に投影され、結果として、その構築物の絶対化につながるのである。意識構造の変容が、既存の意識構造の否定を契機として展開するものであることを考慮すると、今日、先進国に存在している AQAL が、「変容志向のスピリチュアリティ」（“transformative spirituality”）の成立にとり、非常に否定的な影響を及ぼすものであることが理解できるだろう。

しかし、現代に限定したことなく、窮極的に「垂直的悟り」を志向する「変容志向のスピリチュアリティ」を実践するには、神秘体験を醸成するための実践を補完する諸々の実践が必要となる。複数の実践に包括的に取り組むことの重要性を強調する統合的変容の実践（Integral Transformative Practice）の意義は、こうしたところにあるのである。「変容志向のスピリチュアリティ」の実践において重要となるのは、自己の内部に息づく 2 つの対照的なダイナミズムを尊重することである。

- 絶対的な充足・確信の感覚をもたらす肯定のダイナミズム
- 既存の構造を否定して、新たなありかたを志向する深化のダイナミズム

インテグラル・スピリチュアリティにおいて、これら 2 つの対照的なダイナミズムは——少なくとも、人間という存在において自己変容の実践が取り組まれるときには——「管理されるべき対極性」として存在しつづける緊張として認識されることになる。

前者の過度の強調は、意識構造の垂直的深化を阻害する、盲目的な現状肯定傾向を醸成する。また、後者の過度の強調は、意識構造を動揺させつづけること

をとおして、実存的な危機や絶望を醸成する。そのいずれも、真の意味でインテグラルなスピリチュアリティとはいえないのである。

参考資料

- 鈴木 規夫 (2006) ウェブサイト紹介 第四回 : What Is Enlightenment? : Redefining spirituality for an evolving world. Available at <http://www.integraljapan.net/articles/web4.htm>
- 西部 邁 (2000) 国民の道徳 産経新聞社
- Andrew Cohen & Ken Wilber (2006). The Guru and the Pandit: Dialogue XIII—God's playing a new game: Integral spirituality, evolutionary enlightenment, and the future of religion. In What is enlightenment? : Redefining spirituality for an evolving world. pp. 66-95.
- Allan Combs (1995/2002). *The radiance of being: Understanding the grand integral vision; Living the integral life*. St. Paul, MN: Paragon House.
- Brad Reynolds (2004). *Embracing Reality: The integral vision of Ken Wilber*. NY: Jeremy P. Tarcher/Penguin.
- Bill Torbert and associates (2004). *Action inquiry: The secret of timely transforming leadership*. San Francisco: Berrett-Koehler Publishers.
- Ken Wilber (1995/2000). *Sex, ecology, spirituality: The spirit of evolution*. Boston: Shambhala.
- Ken Wilber (1997). *The eye of spirit: An integral vision for a world gone slightly mad*. Boston: Shambhala.
- Ken Wilber (1999). *One taste: The journals of Ken Wilber*. Boston: Shambhala.
- Ken Wilber (2000). *Integral psychology: Consciousness, spirit, psychology, therapy*. Boston: Shambhala.
- Ken Wilber (2001). *A theory of everything: An integral vision for business, politics, science, and spirituality*. Boston: Shambhala.
- Ken Wilber (2002). *Integral psychology: Consciousness, spirit, psychology, therapy*. Boston: Shambhala.
- Ken Wilber (2002). Introduction to Excerpts from Volume 2 of the Kosmos Trilogy
- Ken Wilber (2002). Excerpt A: An integral age at the leading edge. Available at <http://wilber.shambhala.com/>
- Ken Wilber (2002). Excerpt B: The many ways we touch: Three principles helpful for any integrative approach. Available at <http://wilber.shambhala.com/>
- Ken Wilber (2002). Excerpt C: The ways we are in this together: Intersubjectivity and interobjectivity in the holonic Kosmos. Available at <http://wilber.shambhala.com/>
- Ken Wilber (2002). Excerpt D: The look of a feeling: The importance of post/structuralism. Available at <http://wilber.shambhala.com/>
- Ken Wilber (2006). *Integral Spirituality: A startling New Role for Religion in the Modern and Postmodern world*. Boston: Shambhala.

¹ 例えば、トランスパーソナル・コミュニティにおいては、解釈の参与しない個人の純粋な神秘体験がまずあり、そして、それがAQALという影響のもとに解釈されるととらえられているようである。しかし、そうしたとらえかたは人間

の体験というものについての誤解である。実際には、「個人の純粋な体験」は、まさにそれがひとつの体験であるということにおいて、すでにAQALの創造物なのである。

² しかし、非常に興味深いことは、インテグラル思想の提唱するこうした包括的な発想と共振する発想が「保守派」といわれる人々から投げかけられていることであろう。例えば、長くなるが、西部 邁（2000）の著作の一部分を紹介しよう。

他人への迷惑といったとき、「他人」として誰を想定するべきなのか。脱歴史的なものとしての近代にあっては、現代世代の欲望に過度な関心を寄せる。つまり、時間軸の上で過去を想起し未来を展望するというふうには構えない。「現在の自分」が、つまり自我が、何より優先させられるので、「他人」といったときも、「自分の周囲にいる現在の他人」のことしか視野に入っていない。そうならば、たしかに、街角の少女売春は他人に迷惑をかけていないということになる。

しかし、かつて福澤諭吉が喝破したことなのだが、他人に迷惑をかけなければ何をやっても自由だ、というのは劣等な自由論にすぎない。「自分」が歴史という精神的土壌において形成されたと認識し、さらに「自分」のうちに、私心や個人だけでなく、公心や集（団）心もあると認識するならば、人はかならず、過去からのいかなる道徳を受け継ぎ、未来にいかなる道徳を引き継がせるかについて、無関心ではおれなくなる。あっさりいえば、自分たちの孫子の世代にたいして何ほどか責任を持たなければならない、ということである。そうならば、それが残されたら将来の世代が迷惑に思うような制度や風習を、現在において禁じるべきだ、という徳律が成立する。つまり、「他人」は現在の他人に限られないし、ましてや目の前にいる他人ということではないのである。そういう空間的および時間的な他人一般にたいして迷惑になるようなことをしてはならない。そう考えなければ、まともなパブリック・ソサイアティ（公共社会）をつくることができない。これが福澤諭吉のいわんとしたところである。

ほかの言い方をすると、人間の精神には、目の状況に縛られない力がある、ということだ。人間の能力を十分に活性化させるためには、まだ生まれていない人々およびまだ会ったことのない人々のことについてまで想像力をはたらかし、その人々とのありうるべきかかわりについて論理力を駆使しなければならない。それを阻害するような行為に徳律（さらには法律）によって制裁を加えるのはまったく当然のことである。

少女売春が放任されるようになってしまったら、自分の娘、孫娘そして曾孫娘も、そういう放恣（ほうし）な社会のなかで暮らさなければならなくなる。たとえば彼女らが、街角で中年男たちから売春をしないかと誘われることになる。そのときに彼女らが感じるであろう不快感や社会にたいする失望、というようなことまでを想像するのでなければ、道徳について論じる資格はない。(pp. 597-598)

³ ただし、ここでの「ありのまま」は、既存の意識構造を破壊する危険を冒してまで、自己を再構築しようと思える深化の衝動をありのままに抱擁するものではないことを留意する必要がある。